

ものに努めております。

本日は、先ほどご覧いただきました、明日から開始をいたします、天竜寺のガイドブックをお配りしていただいておりますので、参考にご覧いただければというふうに思います。これら、インターネット、それから、専用ガイドブックの取り組みというのは、昨年の頭から実施をしております、その成果の確認というところまでは至っておりませんが、今後も、新しい展開方法というものを検討していきたいというふうに思っております。

それから、もうひとつ、鉄道会社固有の取り組みというか、当社の東京駅の八重洲北口付近です、京都・奈良の旬の情報が満載でございます、「京都・奈良観光ステーション」という、情報発信基地を開設しております。旅行を計画される段階でありますとか、これからまさに新幹線に乗ってお出かけになれるというお客様がですね、乗車される前に、気軽に、立ち寄られて、情報収集されるなど、京都・奈良へのご旅行のですね、いわゆるキーステーションとして、知る人ぞ知る存在となっているかと思っております。

「京都・奈良観光ステーション」のチラシをお配りさせていただいておりますので、皆様方も是非ご利用下さい。

繰り返しになるかと思いますが、最終的にはまあ新幹線をご利用いただいて、京都・奈良へご旅行に行っていただけるように情報発信に努めてまいりたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

②近畿日本鉄道株式会社 東京支社課長 中澤昌弘氏

近畿日本鉄道東京支社の中澤でございます。本日は、歴史街道フォーラムということでございますので、歴史街道の主要ポイントでございます、奈良にスポットをあてて、「あなたは奈良を知っていますか？」というテーマで、近鉄の取り組みをお話させていただきます。

まず、近鉄の路線をご説明いたします。近鉄は、大阪・京都・奈良・三重・愛知・岐阜、の2府4県にまたがる鉄道会社でございます。近鉄は、通勤輸送・地域輸送の他に、大阪・京都・奈良・吉野・伊勢志摩・名古屋、これらを特急列車で相互でネットワークを結びまして、都市間観光輸送という役割を果たしております。

さて、本日のテーマであります、奈良のご案内をさせていただきます。

まず、新幹線で京都まで、約2時間15分、京都で乗り換えすぐでございます、京都から奈良まで約30分。東京から僅か2時間台で、奈良まで行っていただく。ということ出来ます。さらに、桜で有名な吉野までは、京都から特急が便利でございますし、また、名古屋からは、飛鳥、吉野へも近鉄特急で一直線で行っていただくことが出来ます。京都・奈良エリアにおきます、歴史街道のメインルート・テーマルートを、これを近鉄の路線図に重ねてみます。

まず、伊勢から飛鳥に延びる、古代史ゾーン。そこから北に行きまして、奈良時代ゾーン。平安・室町ゾーン。そして、大阪へ向かう、戦国江戸時代ゾーンに続いてまいります。吉野から南は、修験者秘境ルートが広がっております。これらのゾーンをさらに、今度は近鉄沿線の地名をもうひとつ当てはめてみましょう。まず、日本最古の道と言われる、山の辺の道がある、室生・山の辺エリア。古代史の中心舞台であります。飛鳥・吉野エリア。大阪の河内地方から続く、葛城・南河内エリア。聖徳太子にゆかりの深い、斑鳩・信貴山エリア。奈良市を中心とした、奈良エリア。それから少し北へ延びまして、京都の南部から奈良市の東方に広がります、南山城・柳生エリア。そして、京都周辺の京都エリア。ご覧の通り、近鉄沿線には、歴史街道に関係のある文化遺産がご覧の通りいっぱいございます。

ところで、そもそも、京都・奈良という、その魅力は一体何なのでしょう？

京都・奈良を大きく捕らえますと、歴史街道のテーマでもありますが、飛鳥から奈良～平安～室町へと続く、日本文化の石杖となった地であります。言い換えますと、京都・奈良の文化財に代表される、世界遺産・歴史文化の宝庫であり、日本人の精神的なふるさとであると言えます。よく旅

行パンフレットや観光ガイドを見ておると、「古都、京都・奈良への旅」というように、古都という一言で括られてしまい、同一視されてるのではないかと感じております。しかし、先ほどからのお話の通り、京都・奈良はそれぞれに独自の文化や歴史を持っており、それぞれがその土地を訪れる人々を魅了いたしております。しかし、実際、私たちがこちらにお住まいの方々とお話をしておりますと、「まあ、やはり」というか、あまりにも、先ほどのJRさんの立派なコマースの影響なのかも解りませんが、「古都、京都」という印象が非常に強くてですね、京都と奈良の違いがなかなか解ってもらえない。そういうふうな気がいたしております。

これを私、京都と奈良の違いを、観光という観点から私流にちょっと整理をしてみました。まず、京都についてですけれども、主な観光スポットを挙げますと、金閣寺や清水寺に代表される神社仏閣であり、京の町屋と呼ばれる美しいまちなみであると。しかし、京都のそれらは、かなりの多く京都市内にあるのではないかと考えられます。京都の魅力は、いろんな言葉で表現されております。1000年の都、歴史とモダンが調和した町、京都の町屋に見られる整然とした落ち着きなど、京都の町のどこをとっても、京都らしさを感じることが出来る。つまり京都というまとまり、調和の中に、個々の神社仏閣の持つユニークさというものが現れてるように思われるのであります。

東京から京都を訪れる人々にとって、京都というのは、伝統文化を感じながらも、解りやすく、そして、気軽に楽しめる空間と言えるのではないのでしょうか。

一方、奈良はどうでしょう。観光ポイントは東大寺の大仏さまであり、町とか、万葉文化館、キトラ古墳などいろいろございます。と、大仏さまは奈良市内でございまして、万葉文化館などは飛鳥でございまして。そして、さらに南を下ると、山桜や修験道場の入口として有名な吉野など、いわゆる文化遺産が奈良県全体に広がっているように思われます。

広大な奈良公園と、それにつながりますエリア一帯に、全国的に有名な、神社仏閣が固まって建立されている姿、そういう風景は、日本の国内でも特質すべき魅力であると、考えておる次第でございまして。また、田んぼのまん中にある古墳や遺跡が、町の人々に大切に保存されている中で、妙に観光化されていない。いわゆる、何て言うんですか、荒らされていない。手付かずの魅力というのを残している、こういう様子は、悠久の太古の歴史をしっかりと感じさせる思いでございまして。

このように、一口に奈良といっても、地域によって異なる、多様な歴史や文化を感じることが出来るのであります。「ゆっくりと過ごしたい。」そのような旅行を、心から満足さしてくれるのが奈良であり、そして、奈良への旅であると言えます。

ここでおいでの皆様の中には、「まあ昔、修学旅行で奈良に行った。」と。「奈良は良く知っている。」と。こういうふうにおっしゃる方、たくさんお出でだと思います。しかし、先ほどから申し通る通り、京都と奈良を同じ古都というとらまえ方で終わっていたり、何となく知ってるつもりでいる方々も、結構多いのではないのでしょうか。私も近鉄は、奈良の歴史・文化・世界遺産を紹介していくことを通して、「もっとよく奈良を知ってほしい。」「奈良を身近なものとして感じたい。」と願っております。

近鉄の具体的な取り組みをここでご紹介いたします。まず、雑誌広告を中心に、奈良を紹介していきます。さらにその中で、具体的な旅行プランを提案して、「行ってみたい。」という気持ちを、「奈良へ行く。」という行動に結び付けていただくようにしてまいります。

特に今年は、「東大寺大仏開眼1250年」という、まあ奈良にとっても節目の年であります。私どもは、東大寺を中心に、電車やバスなどを組み合わせた、奈良市内の観光プランを提案してまいります。もちろん、奈良はそればかりではございません。これから、春の時期にピッタリなのが、サイクリングを使った明日香めぐりであるとか、春の吉野山散策などがあります。これらも積極的にアピールしてまいりたいと思います。

近鉄はさらに、これらの観光スポットを巡るのに、お得で使いやすい切符のご用意もいたしております。目的エリアごとに、電車やバスなどが乗り放題の「フリー切符」などは、大変便利でお得でございまして。奈良県内の世界遺産や古代史めぐりにピッタリで、地域別の、最もいわゆるオーソドックスなフリー切符と言えば、「奈良・大和路ポケットパス」。名古屋から入りまして、近鉄電

車で京都に抜けていただく間の、ちょうど奈良県内の電車がフリー乗車となる、片道タイプのフリー一切符、「奈良・大和路スルーパス」。これの切符は、よくばり派の皆様方にお薦めでございます。この2つの切符は、近鉄の駅ほか、近畿日本ツーリスト様やJTB様など、大手旅行代理店にても、発売いただいております。

また、JRさんとの共同企画といたしまして、東京～京都間の新幹線往復と、奈良・斑鳩・飛鳥エリアの電車とバスが乗り放題になります、「奈良の遊々切符」という切符もございます。これは、JRさんの商品として、JR東海さんの主な駅で発売中でございます。

2002年、近鉄の、奈良・大和路キャンペーンをご紹介いたしまして、お話の最後といたします。今年のテーマは、「なごみの旅 奈良」といたします。世の中全体に、いろんな不安が多い、今日この頃でございますけれども、「なごみ」という言葉に象徴させる、心のやすらぎと、奈良が持つ素朴さ、ふところの広さ、奥行き之の深さ、といったものが、今の時代の人々に求められているのではないかと考えました。また、皆さんの中には、「和の旅 奈良」と感じられた方もおいでかと思ひます。「和」とは、西洋に対する日本であり、「奈良」は日本人の精神的ふるさとでもあります。皆様それぞれに、いろんなとらまえ方があるかと思ひますけれども、奈良に来ていただくことで、心がなごみ、心のゆとりを感じてもらえる、そういった旅を近鉄は提案していきたいと考え、この思ひを、この言葉に託しました。「なごみの旅 奈良」をキャッチフレーズに、近鉄電車は頑張っまいます。皆様が近鉄電車で、奈良の旅を満足していただけることを切に願ひまして、近鉄の取り組みについてのお話しを終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

③西日本旅客鉄道株式会社 京都支社運輸課長 田上博久氏

歴史街道推進協議会10周年、おめでとうございます。また本日は、お招きをいただきまして、ありがとうございます。私はJR西日本、京都支社の田上でございます。どうぞよろしくお願ひをいたします。

本日は、当社の取り組みをご紹介させていただきたいと思ひます。

私ども京都支社は、滋賀県のほぼ全域と、京都府の南部地域、大阪府の一部エリアを受け持つおる支社でございます。歴史街道推進協議会でメインルートに位置付けておられる、京都から奈良を経て飛鳥に至るルート上に、私どもの奈良線がございます。京都支社では、この奈良線につきましては、線区全体を管理をしておるといふことでございます。

さて、私どもでは、昨年の3月3日に、奈良線で大幅な輸送改善を行いました。主な内容といたしましては、全線34.7kmのうち、一部区間でございますけれども、8.3kmを複線化し、併せて、宇治～新田間に、新駅「JR小倉駅」を設置するとともに、宇治駅の橋上化なども沿線自治体の協力を得、行いました。さらに、これらのハード改良に併せまして、ダイヤ改正を行ひまして、これまでの単線による輸送サービスというイメージを払拭すべく、努めているところでございます。

具体的に申し上げますと、まず、朝夕のラッシュ時間帯でございますが、上下とも、1時間あたり、3本から4本の列車本数であったものを、1時間あたり4本から8本と大幅に増発を致しました。また、新型車両でございます、221系という車両を投入いたしまして、快適性の向上を行うとともに、快速、区間快速を新設をいたしました。これによりまして、京都～宇治間は9分短縮し、所要時分は約15分。京都～奈良間につきましては、従来、約60分かかっておりましたけれども、約20分の短縮といふことで、大幅な短縮を行うなど、ようやくおかげ様で、都市型鉄道にふさわしいサービスを提供することが出来るようになってまいりました。

また、デイトムにおきましても、従来は時間あたり4本の列車本数でございましたが、これを時間あたり6本に増発しております。このうちの2本は、「みやこ路快速」というネーミングした快速電車でございます。京都～奈良間を約40分で結び、奈良・京都方面へのお出かけの利便性を向上しております。さて、ご存知の通り、京都と奈良は、ともに歴史と文化の宝庫であります。

京都・奈良の文化財はもとより、奈良線沿線には、世界文化遺産に登録された、宇治の平等院鳳凰堂や、宇治上神社を始め、四季を通じて自然を満喫できる山城古道などの文化財や観光素材が点在しております。私どもでは、通勤・通学のお客様への小口のほか、観光目的で沿線を訪れるお客様への情報発信についても積極的に取り組んでまいりました。今年も、春シーズンに、東大寺及び奈良国立博物館で開催される、「大仏開眼1250年、東大寺のすべて展」を中心に「いい古都 奈良キャンペーン」を実施して、東大寺様を始め、関係機関のご協力を得ながら、積極的に取り組んでまいりたいと考えております。

また、京都・奈良間のご利用を促進するため、「みやこ路快速回数券」という商品造成も行っております。個人で、またグループでご利用いただけますと、大変お得で便利な回数券になっておりますので、ビジネス・観光に是非ご利用いただきますようお願い申し上げます。

只今ご説明しましたとおり、私どもでは、昨年実施しました、奈良線の輸送改善を契機に、さまざまな取り組みをおこなってまいりましたが、本年の3月23日に、さらなる利便性の向上を目指し、ダイヤ改正を実施いたします。改正内容は、昨年実施を行いました、有通勤時間帯の列車本数の拡大をさらに進度化する。

ということで、現在、21時台から22時台、1時間あたり2本から3本の列車本数でございますが、これを1時間あたり4本から5本に改善し、夜間時間帯の増発により、お客様のご帰宅の利便性を向上してまいります。引き続きご愛顧を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、昨年、奈良線のイメージアップと観光誘致をテーマに、PR用のビデオを少しドラマ風にアレンジをして製作してみました。今回、このような機会を頂戴しましたことを、主催者の皆さんに感謝いたしまして、はなはだ手前味噌ではございますが、ご覧いただきたいと思っております。本日はどうもありがとうございました。

(JR西日本PRVTR放映)

6. 座談会「京都～奈良の新しい魅力」

京都観光文化振興会代表理事・同志社大学文学部教授	廣川 勝美氏
華嚴宗宗務長・東大寺執事長	上野 道善氏
万葉古代学研究所副所長・奈良大学文学部助教授	上野 誠氏
世界文化社「家庭画報」編集長	川崎阿久里氏
小学館「サライ」副編集長	榊田 一也氏
交通新聞社「旅の手帖」編集長	中村 直美氏
コーディネーター 歴史街道推進協議会事務局長	井戸 智樹

井戸局長

前半の部で、7名の方々からそれぞれに歴史文化を愛する立場、保存していく立場、活かしていく立場、伝えていく立場として、プレゼンテーションをいただきましたがいかがだったでしょうか。

只今から6名の方々に、パネラーでご出席いただき、座談会を始めさせていただきます。

昨年秋に、歴史街道推進協議会で、京都～奈良～飛鳥をご覧いただく「プレスツアー」を実施いたしました時のお三方にご参加いただいております。今日のプレゼンテーションも含め、現地を訪れてみての、ご感想とか、まず、そこから伺いしたいと思います。

川崎さんから一言お願いできますでしょうか。

川崎編集長

宇治～奈良をめぐる2日間だったんですが、歴史街道倶楽部の会員の方々をはじめ、一般の方々と、最初2日間一緒にさせていただいたんですね。で、私どもの読者とおぼしき方々と一緒に廻りまして、普通取材旅行といいますと、どうしても取材者の目線だけというふうになるんですけども、読者の目線をお持ちの方々と一緒だったので、非常に興味深かったです。

それから、各地で、ボランティアガイドの方々のご案内してくださったんですが、まあご案内の仕方は、本当に、とつとつとした素朴な形だったんですけども、非常になんかこう暖かみがあって、通り一遍のガイドさんでは味わえない、何かすごく良さというものがあつたように感じられました。個人的に非常にまあ、楽しかったです。

再発見があつたのは、奈良のほうだったんです。と言いますのは、先ほどやはり、奈良と京都の差別化みたいなことで、各鉄道会社さんがおっしゃってたように、なんとなく奈良って、1回、修学旅行で行ってしまつて、もう体験してしまつた、何か終わっちゃつたっていう、印象を持つてたんですが、あらためて見てみると、非常に見所もまた新たですね、薬師寺さんの平山郁夫さんの壁画ですとか、新しい本当に見所が、だんだんに増えてるんだなあというふうに思つて、帰つてきた次第です。

あと、宇治の平等院のミュージアムですね、鳳翔館。あちらのほうで、新たにオープンしてから、初めて伺つたんですが、大変モダンな造りで、見やすく、印象深い思いをして帰つてまいりました。

井戸局長

ありがとうございます。続きまして榊田さん、一言、お願い致します。

榊田副編集長

私も非常に、新しい発見、再発見というのがありまして、楽しくて有意義なツアーでした。

一番記憶に残っておりますのは、先ほど、上野先生の非常にユニークで、解りやすいご説明がありました。万葉文化館に行きまして、私、不勉強なもので、普段、万葉の世界っていうのは、歌

を読んでも、こうイメージとして出て来ないんですが、1階で、加山又造さんですとか、高山辰雄さんですとか、万葉の歌をモチーフにした絵というのがございまして、「この方は、こういうイメージを持ってらっしゃるんだなあ」というのをひとつひとつ、見て歩くだけでも、非常に楽しいし、有意義だと思いました。

地下にありますと、その万葉の古代の生活が再現されてるわけですね。それがまた、非常に楽しくて参考になりました。その環境というのが、非常に面白くて、素敵なところでして、日本庭園もある。その先には、瓦葺の綺麗な民家がずっとつながってるんですね。それこそ「あっ、昔の世界ってこういう感じなんだろうなあ」という感じでしょうか。

他にも、昔ながらの民家がありまして、庭に畑があるような、柿の木がなっております、焚き火があって、煙があがってるんですね。小さなお兄ちゃんと女の子が遊んでるんですが、やがて、ちょっと見てましたら、三輪車の取り合いで喧嘩をし始めまして、妹さんのほうが、おばあちゃんに泣きながら、「お兄ちゃんが三輪車取ったあ」といってるわけですね。なんか、まあ万葉の時代とはまた違うんですが、昭和30年代の世界にこう戻ったような、ほのぼのとした感じがあって、ずっと私はしばらく見ていました。

上野先生、あれはあそこまで演出されているわけじゃないんですよね、まさか。

上野副所長

今日のお話と同じで、全部演出です。…………… 実を言いますとね、私たちは、万葉文化館を造る時に、ボクシングで言うと、ガードをせず打ち合おうということをしました。

つまり、復元というのは、ほとんど解らないわけですよ。

そうすると、造ってしまえば必ず学者が、まあ私も学者の一員なんですが、「あれはどうも違う」とこういうふうに言い出すんですが、それを全部止めてね、とにかく、やりたい放題にやろうと。それで、アートも、やっぱり現代アートで、もう日本画を代表する人は全部揃えるし、若い人も揃えようというようなことでやりました。後でまた言うと思うんですが、私、ちょっと、各鉄道会社、各社さんのプレゼンテーション見まして、枯渇してると思いますよ。

なんかもう固定化されたいくつかのイメージの中で、グルグル、グルグル、廻ってるだけで、もうあれだとなんか、縮小再生産で、グルグル、グルグル、スパイラル状に落ちていくんじゃないかなという気がします。

でも、あんまり言い過ぎると、井戸さんから怒られると思うので、これぐらいにしときます。

井戸局長

上野さん、今、万葉文化館行くと、富本銭も見れるんですね。亀型石造物も。現時点では。

上野副所長

発掘したものを生で見るということがひとつなんです。発掘したものをそのまま庭園とかで見ることできる。それから、なんかこう、飛鳥といたら、ひなびた感じで、目を閉じて、感じてもらうみたいな世界なんですが、そうじゃなくって、新しいバーチャルなもの、例えばプリクラも作りました。ですから、やっぱり、お勉強プラスαのところを、どういうふうに持って行って、そこからまたお勉強してもらうというような持っていき方が、これからはひとつ必要じゃないかなと思います。

井戸局長

ありがとうございます。じゃあ、中村編集長お願いします。

中村編集長

はい。私は、プロフィールにも書いていただいたように、三重県出身なんで、今日は、さっき

上野先生が、「万葉集は言葉の文化財だ」とおっしゃったので、方言のまま、いかせていただきます。伊勢のほうの言葉でしゃべらせていただこうと思います。こないだ行った私たちの「プレスツアー」は、たまたま、世代もこの3人は同じだったせいもあって、まさに、「サライ」さんのよくお使いになってる、「大人の修学旅行」ですか、そんな感じでした。

私は、三重県に育ってるので、奈良とか京都っていうのは、まさにさっき、東大寺の上野執事長がおっしゃったように「もう修学旅行で行った」と。「行った」というので、もうずっと「あそこも行った。ここも行った。ここも行った。もう行った。行った。行った。」で、ずっと行ってない。

それからもう、あんまり行く気が、おこらんかったんですね。それなんで、お声掛けていただいた時、万葉ミュージアムとか、宇治の平等院ミュージアムとか、新しいまだ見てないところが、入っていたので、「ああ、そんなら行かしてもらおうかなあ」と思って、行かせていただいたんです。

やっぱり、「40歳過ぎて行くと、また違いますねえ。」ということ、「修学旅行とは違うなあ」ということを、あらためて感じた楽しい旅でした。

で、皆さんいろいろ、記憶に残るところはあったと思うんですけど、私は、宇治の「平等院ミュージアム」が、すごく楽しかったです。平等院ミュージアムの展示もほんとにいいんですが、ミュージアムのグッズが、もうこれが、買いたくなるもんばかり一杯あるんですよ。

行かれた方は、「ああ、うんうん」と思うし、行ってない方は、「今度行ってみよう」と思われると思うんですけど、今日は、1つ、2つ持ってきましたので、それを見せようと思います。ご本尊の後ろに、雲の上に乗った仏さんで、楽器ひいたり、拝んどったり、踊ったりっていう、52体の菩薩があるんですけどね、その菩薩をですわね、なんとこれをパソコンのマウスパッドにしてみました。私は今これ使ってるんですけど、仏さんの上で、マウスを毎日こう動かしてるわけです。で、これはたまたま、私「ええなあ」と思うて買って、うちの会社の女の子にもプレゼントしたんですが、川崎さんも同じものを買われたと。いやほんとにそそられるものが多かったです。

あと、宇治はボランティアガイドさんが、すごく熱心で、宇治上神社っていうところに連れて行っていただいた時に、「蛙股」っていうんですか、建築材なんでしょうけど、こういうかえるの足みたいな、そいで、それが、古い時代ほど、装飾があっさりしとって、あとの時代に行くほど、なんかこういういろいろゴテゴテついとるらしいということ、そのボランティアさんガイドに教えてもらいました。で、そこは古いらしいですよ、すごく。

で、格子の間から一生懸命のぞいたんですけど、そこで、その宇治上神社の「蛙股」も含む、「日本三名蛙股」というのがあることも、教えてもらいまして、やっぱりそういうのを教えてもらってこそ、大人の修学旅行かなあと、40歳過ぎて行った修学旅行は、「よういろんなことを勉強したなあ」と、「小学校の時とは違うなあ」と、そんなツアーでした。

井戸局長

ありがとうございます。まず、上野執事長ちょっとお伺いしたいんですけどね。川崎さんのほうからも、中村さんのほうからも、もう奈良は1回行って見たから、もう1回行くのが大変だというのがあって、私なんかはそのう、お客さんを連れて行く際には、東大寺さんは必ず、戒壇院から正倉院廻って、二月堂、三月堂見て、最後に大仏さんを見せることにしてるんですよ。そうするとまあ、3、4時間、もっとかかりますねえ。半日コースになるんですけども、どうもその、大仏さんの存在が大き過ぎるがゆえに、奈良のイメージがかえって膨らみにくくなってるようなところが、まああろうかと思うんです。当然、大仏さんは素晴らしいんですけども、普段のその奈良のお越しになる参拝者の方々に対して、思ってるっしやることとかありましたら、ちょっと教えていただきたいんですか。

上野執事長

はい。大仏さまを中心に、今、申されました戒壇院、それから三月堂、二月堂、これは皆さん、東大寺来られたら、廻られるんですけども、奈良時代は「八宗兼学の道場」と申しまして、中国

から入ってまいりました、その学問を研究するために、全国のお坊さんが東大寺に留学して勉強されたという、当時の大学のような存在でございまして、で、例えば、私が今お守りしております、その塔中はですねえ、真言院と申しまして、南都における真言の研究の道場であったわけです。

で、やっぱりお大師さんも真言院で、南都の真言の研究をされまして、まあ、弘法井戸という、お大師さんの像もおまつりしてますしですね、お大師さんが使われた、そういう井戸もあるわけです。

我々その行をするときには、その「赤水」と申しまして、その井戸の水を汲んで、その加行をするわけです。本当に浅い井戸なんですけれども、ほんとに綺麗な水が湧くわけです。で、こういうふうなことで、東大寺の境内、まあだいたい、15万余坪あるんですけども、天然記念物の八重桜があったり、今、申しました、そういう弘法井戸があったり、戒壇院、大仏さん、法華堂以外にも、ずいぶんたくさん、見ていただくところがあるわけです。まだ塔中が今、17ほどあるんですけど、それぞれの塔中にみなそれぞれ、像がおまつりしてありまして、重要文化財・国宝をもっておられる塔中もありまして、今回の東大寺展も、奈良博物館と東大寺の境内がこう一体になって、やろうというふうなことです。

まあ、執金剛神は、法華堂のほうに来ていただくわけですけども、それ以外にも、今ありましたように、まだ他にも見ていただくものもあります。

それから、特にそういう古文書類ですね、古文書類など、ちょっと見たいという方は、東大寺にも東大寺図書館がございまして、そこにはずいぶんたくさん古文書類も収蔵されておりますし、この期間中には限らず、あまりこの知られてないものも、おっしゃっていただければ開放させていただくというふうなことにしておりますので、あまり有名な以外のものもですね、またご覧いただけたらと思うわけです。そういう意味からしますと、今回の東大寺展、奈良博物館は、もう1日ばかりに来ていただかないと、充分満足していただけないんじゃないかと思うわけでございます。

井戸局長

夏はほたるも養成してらっしゃいますねえ。

上野執事長

東大寺ポータルと申しましてねえ。大仏ポータルいうて、ちょっと大ほたるも、養成しております、6月前後には、大きなほたるが、もうほんとに綺麗に飛び回るといふような感じでございます。

井戸局長

ありがとうございます。まず、1巡させていただくとしまして、廣川先生、中村さんのほうから、宇治のボランティアガイドのお話がありましたけれども、先生は、今日は源氏物語の研究者としてのお話が前半の中心だったように思うんですが、ボランティアとか、宇治の「源氏物語」の京都市内の名所の展開みたいなことで、現在お考えのことありましたら、お願いいたします。

廣川教授

いくつかお話申し上げたいことがあるんですが、先ほど各鉄道会社のビデオを拝見しながら、何か京都いったらお寺と神社。それと、桜ともみじですか。もちろん、それも素晴らしいんですが。

それをつなぐ、私は「物語」と申しましたけども、何かがあるんじゃないかと思っているわけです。そういうひとつとして、「源氏物語」というのを提案させていただいたんです。「源氏物語」には光源氏を中心に、女性がたくさん出てまいりますけども、紫の上、さつき鞍馬でって言いました。これは春の女性なんですね。そして、その他に、夏の花散る里と……。で、明石に行って出会う、明石の入道の娘ですねえ。のちに明石の上といわれますけれど。これは冬になつてる。

光源氏が、六条院という、春夏秋冬の、4つの町、ブロックを持った、広大なものを造りますが、さきほど、話に出ました宇治のミュージアムには、ひとつ模型があります。もうひとつ西本願寺の

ところに「風俗博物館」というのがあります。そこにも一部ございます。まあそういうもので、春夏秋冬の女性がいるわけですね。で、それがそれぞれの「物語」の背景を持つてるわけなんですよ。

花の頃は、都の花は散ったけれども北山でございますよね。それから夏は、橘の花でございます。花橘というのがございます。ホトトギスのね。秋は、嵯峨野の秋を思い出してもらったらいいわけであって。で、冬は実は、明石のあたりの松の雪でございます。それは、明石の上が、都にあとで上がって帰りますけれども、その頃は、渡月橋ありませんが、あとで六条院に入るわけですね。

そういうふうに、春夏秋冬の、まあ京都の風土、山河の風土と物語の女主人公たちが、重なってるといふことがあるわけです。で、そういうところが、30何ヶ所、それに絡みながら、各名所があると、こういうふうにご理解いただきたい。

そしたらそれを、どういう形で、我々が体験出来るかといったら、やはりそこには、風俗がございます。どんな衣装着てるんだらうか。或いは、どんなお香をたいてるんだとかという。或いは、どういう管楽器、弦楽器があるんだらうか。或いは、どういう舞があるんだらうか。そういうことを、体得・体験してもらいたい。それが僕は源氏の旅だと思ってるわけでございます。

ですから、ただ単に、「これは物語の舞台」というだけではなくてですね、そこ特有のものをイメージしながら、しかも、体験的に、そういうもの、知ってもらいたいと。「これが京都のこれからの旅ではないのかなあ。」こういう提案をしたいわけです。そうすると、ご案内役が、かなり重要になってまいります。

今、「冬の旅・夏の旅」は、いいガイドの方が出ておりますが、そうではない、もう少し突っ込んだ、別にかたぐるしい話は、いらなくても、知識をもった、或いは一言を持ったガイドがいるんじゃないか。こういうふうな、こう考えてるわけです。もちろんボランティアでいいんですけども。責任をもってもらうために、実はガイドの講座を始めようと思っております。そして、そこに、いくつかの段階をつけたガイドの資格を提供しようと。そういうふうにご考えております。

そういうことを、今、商工会議所の観光部会と議論しております。

それともうひとつ、観光ということの考え方の問題があると思うんですよ。なんか、アメリカ流のツアーでないものがあるんじゃないか。こういうふうに思っているわけです。物の旅ではなくて、心の旅というものがあるんじゃないかと。私は実は四国の生まれでございます。お四国をいたします。そういう中に、お接待ということでございます。これはあのう、お参りなさるお遍路に対してのもてなしでございます。英語で「ホスピタリティー」と、京都も先ほど、「もてなし」出てきましたけど。これは、中世のカソリックの巡礼者に対するもてなしでございますよね。そこには、宗教心といって、きすぎたならば、なんか人を超えた物との出会いというのが、あるんじゃないかと思っております。で、京都とか奈良というのは、そういう人と人の関係だけではなくて、人を超えたものとのふれあいというのがあってないかと申し上げたいんです。まあ、一言いいうならば、「救いと癒し」で、いいと思うんですが、京都と奈良が提供出来る大事なものではないのかなと思っております。

井戸局長

ありがとうございました。1巡ずつ、一応ご発言いただきましたので、今日、お三方のお話聞かれて、何かそのお三方に対して、「これちょっと、この機会に聞いてみたいなあ」というようなこと、もし出版社、お三人ございましたら、お願いしたいと思います。中村さんどうぞ。

中村編集長

はい。東大寺の上野執事長に、教えていただきたいんですが。今年は「大仏開眼1250年」で、特別に見せていただけるものがいっぱいありますねえ。今回は、ほんとにビックイベントやと思うんですが「どれを見せよう」というのは、誰が決めるんですか？ 奈良好き、仏さん好きにとっては、そそられるものがいっぱいあると思うんですけど。その辺はまだ本当は、いっぱい、いっぱい、いろんなものがあると思うんですが、「これでいこう」とか言うのは、やっぱり執事長が決められ

るんですか？

上野執事長

これは、東大寺の歴史を顧みて、奈良時代の東大寺、それから鎌倉時代の復興、江戸時代の復興というふうには、テーマを組みまして、その時代の価値ある宝物を出さしていただくということで考えました。もちろん、奈良博物館の関係者、それから、朝日新聞と東大寺の3者が、後援でやっておりますので、何回かその会議を重ねまして、この250点余りを選んだわけでございます。だから、この東大寺の歴史に即した、価値有るものということになるわけです。

中村編集長

ありがとうございます。特に執金剛神立像ですか？これは普段は、12月16日のみの特別公開が、今年は期間が長いので、私の廻りの仏好きもですねえ、かなり見たいと言っておりましたので、教えていただきました。

上野執事長

これは、秘仏でございますので、まあ本来、仏さんというのは秘仏であるべきかなあと思ったりするんですけども、本当に彩色が鮮やかに残っておるわけです。で、年に1日ということ、その日に集中します。わんさわんと拝みに来ていただいて、狭いところで、時間掛けてゆっくり拝まれる方が多いものですから非常に混雑するわけです。

今回の場合、特別の長期にわたるわけでございますので、そういう意味からは、本来研究しようという方は、いい機会ではないかと思うわけです。

この御開山の良弁僧正という、これももちろん秘仏で、12月16日にしかオープンしないんですが、この開山、良弁僧正の像をおまつりしている開山堂という御堂がございますんですけども、その御堂の横に、良弁椿といってですねえ、二月堂椿というまあ、椿の古木があるんですわ。ちょうど、これからがその椿の咲く頃で、その椿は赤字に白がこぼれているんですね。

それは非常に古木でございまして、そのお水取りの行中に、その椿の造花をつくって、それをご本尊にお供えするわけです。椿と申しますと、花が咲くとすぐにこうポロッと落ちますので、花だけを造花にして、その生の枝に刺して、そして3月1日から15日の2週間の間、そのご本尊にお供えするというので、赤と白の色紙で造るわけです。

それで遠くから見たら、本当に咲いてるような感じになるわけですけども、まあそういう良弁椿、開山堂の良弁僧正の像のおまつりしておる横にそういう椿もございまして。

井戸局長

ありがとうございます。榊田さん、川崎さん、何かありますか？

川崎編集長

同じく、上野執事長にお伺いしたいんですけども、大法要の時に、染色の復元品や古楽器の再現があたりだとか、具体的にはどういったものになるんでしょうか。これは、一般の方も拝見できるような機会があるんでしょうか。今の技術・工芸の力で蘇ったものっていうのを非常に私たちの雑誌は興味があるので、お伺いしたいんですけども。

上野執事長

ええ、一般の方もご覧いただけますよ。まあいろんなバラエティーにとんだ催し物ということで、それぞれの分野の専門のご先生、先生をお呼びして、講演会等催しておるわけです。

それからインドのお坊さんで、菩提僊那というお坊さんですけども、中国に勉強しにいられて、たまたま遣唐使が、向こうで会って、「ちょうど大仏さんが出来上がるからちょっとひとつ